

Listening Comprehension Strategies の模索

—— 発話特性の分析をとおして ——

広島大学大学院 伊 東 治 己

1 はじめに

最近の新しい傾向の一つとして、listening comprehension (以下 LC と略す)の重要性が再評価、というよりむしろ初めて評価されつつある。いわゆる Audiolingual Method は「聞く、話す」能力に指導の重点を置いた教授法であるが、この教授法においてさえ十分な注意が LC に払われておらず、多分に lingual な面に片寄っているとと言える。Belasco (1965) の指摘どおり、LC は今日の外国語教育において "the most under-estimated and least understood aspect" (1:491) である。LC の対象となる発語はあくまで "slurred continuum" (12:39) であって、これをインプットとしてその中にあるメッセージの意味を理解することは想像以上にむずかしい技能であり、その中には多くの要素が含まれている。LC は決して単なる受身的な技能でもなければ、スピーキングの指導の中で自然に習得されるものでもない。LC には多分に能動的な面もあり (16:125)、その能動的、すなわち、聞き手の側の積極的な働きかけという点において、そこに何か strategy 的なものの存在が考えられる。ここでは、発話に含まれる種々の特性を LC の手がかりとしてとらえ、その分析と平行した形で LC strategies の模索を行って、LC の実体を少しでも解明して行きたい。

2 Acoustically Oriented Approach の欠陥

発話を理解するための手がかりとしては、まず、発話の音響的情報 (音響的手がかり) が考えられる。以前の LC の研究においては特に、構造言語学の影響を受けて、音響的手がかりだけに注意が向けられていた。その結果、LC において聞き手はまず話し手が発する音響的情報を受けとめ、これを分析し、それがいかなる音素の連鎖であるか、さらに、それがいかなる形態素の連鎖となっているか、という具合に次から次に分析と整理を繰り返し、最後には発話の意味を理解するという直線的 LC 理論が主流であった。これはいわゆる構造言語学の発見の手順に相応していて、この理論の不適さは構造言語学のいきづまりの中に象徴的に示されている。この理論においては、音素の acoustic value が多分に固定的にとらえられているが、後に、音素の acoustic value は可変的で決して固定したものではない (9:174)、聞き手は発話の中に物理的に存在していないものも聴き取っている (10)、音響的特性はその回りの環境によって決定される (14:182)、発話の音響的情報はすべて相対的關係にある (16:36-37)、発話の表層構造の分節化は、その音響的手がかりよりも、聞き手による統語構造の把握に基づいている (17:25-26)、ということが明らかになるにつれて、音響的手がかりだけが発話理解の鍵ではないという解釈が、以前の直線的理論に取って代わるようになってきた。

3 音響の手がかり以外の手がかり

3-1 LC における音響面以外の手がかりとしては、まず、文法面の手がかりと意味面の手がかりが考えられる。文法面の手がかりとしては、特に語順、機能語、屈折が重要である。具体的には、発話中の Noun-Verb-Noun というシーケンスは、普通、Actor-Action-Object に相応していて、たとえ意味情報が欠落していても語順だけで発話の意味がある程度把握されうる (2:298)。また、Lewis Carroll の Jabberwocky の例でもわかるように、発話中の個々の語の意

味に関係なく(全く意味情報が欠落している時でさえ)、機能語、屈折あるいは語順に基づいて発話の部分的意味(構造的意味)を把握することも可能である。さらに、認知心理学の立場にある Neisser (1967)によると、これらの文法面の手がかりは発話の句構造を示すものであり、聞き手はこれらの手がかりに基づいて発話を構成する諸要素の相互関係を把握することができる(14:259-267)。

3-2 意味面の手がかりに関しては、まず、発話中の個々の構成要素は semantic constraints に従って機能的に相互に関連しており、場合によっては、聞き手は統語構造を考慮しなくても、発話中の内容語の意味素性に基づいて発話を理解することができる(2:296)。また、文脈も意味面の手がかりとして重要である。文脈なしでは個々の語は意味を持たず(11:112)、文脈は "prerequisite for comprehending prose passages" (3:717)として機能している。たとえば、有名な "Rapid righting with his uninjured hand saved from loss the contents of the capsized canoe." という発話を聞いた場合、最後まで聞いて文脈が明確になってからでないと、下線部の意味はつかめない。この点に関連して、意味がわかってから初めて音が正確に聴き取れるという奇妙な現象も起こってくる。さらに、文脈の存在いかんが発話を理解する時間を左右することがある(7)。意味面の手がかりとして文脈と同様に重要なのが場面である。"Take the big one upstairs." という発話は下線部に関して ambiguous であるが、場面がその曖昧さを排除してくれる。さらに、場面は発話の個々の構成要素を統合して "total interpretation"(4:48)を可能にする働きがある。

3-3 文法面の手がかり、意味面の手がかり以外に発話のもつリズムも重要な手がかりとなっている。リズムは "a structure, which serves as a support, an integrator, and a series of cues for the words to be remembered" で、聞き手の内部に "an intent, a Gestalt, a plan" として存在していて(14:235)、発話の理解、記憶を助ける働きがある。また、リズムは聞き手の memory-span にとって重荷とはならず、むしろ、その中に余白を生み出す。さらに、この余白が記憶されたものの把持を強化して、特に、長い発話の聴き取りにおいて前後の関連づけを可能にして、発話のより完全な理解へとつながる(16)。英語に限定した場合、リズムはさらに重要な役割を担うわけであるが、それについては後述する。

3-4 リズムと並んで発話中のポーズも重要な働きをしている。ポーズは、普通、話し手が息を継ぐためと、語句の意味を明確にするために存在しているが(8:274)、聞き手の立場からすると、ポーズは聞き手に今聴き取った部分を記憶の中で再循環させて、それをさらに前に聴き取った部分と関連づけ、そこからさらに、次に来るものを予想することを可能にしている。ここで注意を要するのは、発話中のポーズは単に物理的に与えられるだけでなく、話し手の側の躊躇、エー、アーという音、繰り返し、あるいは Abercrombie が silence filler と呼んだ You see, You know, I mean, Well といった会話特有の表現によっても提供されていることである。

3-5 スピードは従来ネガティブな要素とみなされがちであったが、ポジティブな要素も多分に有している。具体的には、もし、発話のスピードが必要以上に損なわれれば、発話を構成する個々の要素が強調されて、それが発話理解の単位になってしまっていて、発話全体の構造を把握しにくくなってしまいう危険性がある(13:21)。実際、速い発話が聴き取りにくいのは、スピード自体よりもポーズの存在、長短いかんに原因があると思われる。ちなみに、Miller (1951)は普通の2倍のスピードで話される発話の聴き取りの可能性を示している(11:74)。

3-6 Redundancy (以下 Rd と略す)も LC において見のがすことのできない要素である。Rd は、一般に、ある発話が理論的に運ぶことができる情報量とそれが実際に運ぶ情報量の差と定義

されるが(12:46)、言語がコミュニケーションの手段として機能するためにはある程度の Rd を含んでいなければならない。一般に英語は50%の Rd を含んでいるといわれるが(15:137-138)、ある発話が Rd を含んでいるという場合、発話の表層構造にあらわれた Rd (linguistic Rd) だけでなく、場面や内容における Rd も考慮する必要がある。このような性格をもった Rd の strategic functions としては、まず、聞き手の記憶の負担を軽減する働きが考えられる。つまり、発話を理解するために、聞き手は表層構造にあらわれたすべての情報を吸収する必要はなく、自分に必要なものだけを吸収すればよいわけで、その結果生まれる memory storage における余裕が次から次に入ってくる情報のより円滑な処理を可能にしてくれる。また、Rd は騒音の中での LC を可能にする働きがある(18)。騒音のためある部分が聞こえなくても、あるいは、はっきり聞こえなくても、他の部分で十分補足されているわけである。

4 2つの型の Listening Comprehension Strategies

4-1 以上、不十分ながら LC における種々の手がかりを分析したが、それらは2つの型に大別される。第1の型は、音響面、文法面、意味面の手がかりのように language-specific な要素が濃い手がかりで、第2の型はむしろそのような要素がうすい手がかり、すなわち、多分にユニバーサルな要素を含んだ手がかりである。ここでは第1の型を linguistic cues (以下 Ling C と略す)、第2の型を perceptual cues (以下 PC と略す)とし、さらに、前者に基づく strategies を linguistic strategies (以下 LS と略す)、後者に基づくものを perceptual strategies (以下 PS と略す)とする。これまでの LC の取り扱いにおいては、とにかく、PC への配慮が欠けていて、ともすれば Ling C だけを取り上げて、LS の枠の中だけで問題が考えられていた傾向がある。複雑なメカニズムをもつ LC を取り扱う際、言語的な面だけに注目するのは不十分で、準言語的、非言語的な要素への配慮も必要であり、そうすることによって初めて LC の性格をより正確に把握できるものと思われる。

4-2 このように LC strategies は2つの型に大別されるが、より重要なことは、LS に対して PS が優位性を有していることである。具体的には、LC において聞き手は PS によって発話の一般的特徴、あるいはパターンを認知して、LS を行使するためのある程度の地ならしを行っている。つまり、PS は Neisser (1967) が唱える passive filter system (14:213) の役割を果たしている。しかし、これは、聞き手はまず PS によって、そして次に LS によって発話を理解するということを意味しない。むしろ、両方とも同時に適用されるが、ただちがう点は、PS は発話の一般的特徴の把握につながる一方、LS は各言語特有な、つまり、language-specific な特徴の把握につながるということであり、一般が特殊に優先するという意味において、PS の優位性が考えられる。これは LC においてパターンの認知の重要性、優位性を強調する Miller (1951)、Fry (1970)、Mueller (1974) らの意見とも一致している。

4-3 PS の中で特に重要なのが発話のリズムを認知するということである。Dooling によると、文の聴き取りにおいてそのリズムがシンタックスとともに重要な役割を果たしている。4-2 でパターンの認知の重要性に触れたが、リズムがそのパターンの認知に大きく貢献しているのである。実際、パターン自体、リズム的な性格を有している。われわれ日本人が英語の歌をなかなか聴き取れないのは、英語の歌詞がもっている英語本来のリズムが歌のメロディーによってこわされるためである。4-3 でリズムの一般的な戦術的機能に触れたが、英語の LC に限定した場合、さらに重要な役割を果たしている。英語のリズムは stress-timed rhythm といって、ひとつの発話の中で文強勢の置かれている音節が等間隔に位置しており、さらに英語の言語現象

として、機能語よりは内容語に文強勢が置かれる傾向がある。普通、強勢の置かれていない語よりは強勢が置かれている語の方が聞き取りやすいので、発話のリズミックパターンを認知すれば、ごく自然にその発話の理解にとって特に重要な内容語がピックアップされる。さらに、聞き手はピックアップされた内容語の意味素性を考慮して、これら内容語相互の自然で論理的な関係を把握し(4-2参照)、発話全体の意味の理解に十分な意味情報を得ることができる。これにシンタックスの認知から得られる統語情報が加われば、発話の理解はさらに正確になる。極言すれば、たとえ文強勢が置かれていない部分が聞き取れなくても、文強勢が置かれている内容語さえ聞き取れていれば、聞き手は自分が持っている予想力で聞き取れていない部分を補足しながら、発話を理解することができるのである。

5 おわりに

LCの能動性という視点からLC strategiesを設定して、発話特性を分析し、それをLCの手がかりとしてとらえ、それらの手がかりが聞き手の側からどのようなstrategic functionsをもっているか分析しながら、LC strategiesの性格を考察してきた。言語技能の指導にはその技能の性格を十分把握する必要がある。その意味で、ここではLC strategiesを模索しながらLCの性格を考察した。模索という言葉が示すとおり、まだまだ手探りの状態で、ここではLCに対するアプローチの1つの新しいモデルを提示したにすぎず、さらに多くの問題が残されている。たとえば、発話特性の分析をさらに徹底する必要があるし、種々の手がかりの比重関係も考察されねばならない。また、LCのプロセスの分析をとおしてもLC strategiesを模索していくことが必要である。さらに、ここでは主にすでに外国語のcompetenceを有するideal listenerにおけるLCの性格を考察してきたが、わが国の中学生、高校生のようにまだ外国語のcompetenceを十分獲得していない学習者におけるLCの性格についても考察する必要があるし、年齢差も十分考慮しなければならない。仮に、子供のLCにおいてはLSよりもPSの方が重要であるということがわかれば、それに相応した指導法、教材を考えていかなければならない。それらの問題については、稿を改めたい。

REFERENCES

1. Belasco, Simon. 1965. "Nucleation and the Audio-Lingual Approach," MLJ, 49, 8.
2. Bever, T.G. 1970. "The Cognitive Basis for Linguistic Structures," in J.R. Hayes (Ed.), Cognition and the Development of Language, New York: John Wiley & Sons, Inc.
3. Bransford, J.D. & M.K. Johnson. 1972. "Contextual Prerequisites for Understanding: Some Investigation of Comprehension," JVLVB, 11,6.
4. Clark, R., S. Hutcheson & P. Van Buren. 1974. "Comprehension and Production in Language Acquisition," Journal of Linguistics, 10,1.
5. Dooling, D.J. 1974. "Rhythm and Syntax in Sentence Perception," JVLVB, 13,3.
6. Fry, D.B. 1970. "Speech Reception and Perception," in J. Lyons (Ed.), New Horizons in Linguistics, Penguin.
7. Haviland, S.E. & H.H. Clark. 1974. "What's New? Acquiring New Information as a Process in Comprehension," JVLVB, 13,5.
8. Jones, D. 1918(1960, 9th Ed.). An Outline of English Phonetics, Tokyo: Maruzen Company Ltd.

9. Lieberman, P. 1963. "Some Effects of Semantic and Grammatical Context on the Production and Perception of Speech," Language and Speech, 6, 172-187. (p.67)
10. _____. 1965. "On the Acoustic Basis of the Perception of Intonation by Linguists," Word, 21, 1.
11. Miller, G.A. 1951. Language and Communication, New York: McGraw-Hill Book Company, Inc.
12. Moulton, W.G. 1966. A Linguistic Guide to Language Learning, New York: The Modern Language Association of America.
13. Mueller, T. 1974. "Another Look at How to Teach Listening and Reading Comprehension," MLJ, 58, 1-2.
14. Neisser, U. 1967. Cognitive Psychology, New York: Appleton-Century-Crofts.
15. Rivers, W.M. 1968. Teaching Foreign-Language Skills, Chicago: The Univ. of Chicago Press.
16. _____. 1971. "Linguistic and Psychological Factors in Speech Perception and Their Implications for Teaching Materials," in P. Pimsleur & T. Quinn (Eds.), The Psychology of Second Language Learning, London: Cambridge University Press.
17. Slobin, D.I. 1971. Psycholinguistics, Glenview, Ill., Scott, Foresman & Company.
18. Spolsky, B., B. Singurd, M. Sato, E. Walker & C. Arterburn. 1968. "Preliminary Studies in the Development of Techniques for Testing Overall Second Language Proficiency," Language Learning, Special Issue, No.3.